客船よもやまばなし

＜連載⑭＞

次世代の海上交通・物流の在り方に関する調査研究

大阪府立大学海洋システム工学科教授
池　田　良　穂

大阪に　本拠地を持つ船舶関係の学会組織である関西造船協会は、2500名の造船・船舶技術者や海洋技術者の会員を擁する組織であり、毎年2回の学術講演会の他、シンポジウム、見学会などの企画を行う他、年2回学術論文集を発行するとともに、年4回ユニークな会誌「らん」を発行している。日本の中には、造船関係の学会としてはこの他に日本造船学会、西部造船会という2つの学会があり、毎年秋にはこれら3学会の合同の講演会が催されている。

筆者も、関西造船協会の会務委員、編集委員、評議員、理事などを努めさせて頂き、微力ながら会の運営のお手伝いをさせて頂いてきた。こうした学会も、造船業界、海運業界の浮き沈みに大きな影響を受ける。会員自体の数の増減もそうだし、会の経済的な屋台骨とも言える賛助会員の増減も、会の組織がそれほど大きくないだけに直接響いてくる。学会を支える会社の積極的な姿勢があるかどうかで、発表される論文の数も内容も左右され、学会自体の浮沈にまでかかわって来るのである。産業を背景にした技術を扱うのであるから至極当然のことではあるが、時としてなんとも淋しい思いにかられることがある。

最近も、造船所の中で賛助会員から降りる所があった。会費自体はそれほど大きなものではないものの、本業が振るわない時であるから、経費節減のために学会活動からも手を引くということは分からないではないが、自社の将来だけでなく造船の将来自体を投げたような感じがして、なんとも淋しい思いがしたものである。学会活動こそ、その学問分野、産業分野の将来への芽であり、希望でもあると思うのだが。

こんな　思いもしながら、一種のボランティアとして、この学会活動のお手伝いを

して来たが、今年の春に、この協会の主な役職すべてを一時退くこととなった。筆者の大学の中の先生方との交代時期にちょうどうまく当り、晴れて久々のお役御免となったのである。もちろん、研究者の一人としての会員としての活動は今まで通りにさせていただくのだが。

さてさて、そこで自由を謳歌すればよいものの、根っからの仕事好きの本性が現れて、とにかくこの機会に何かしてみたいと思い始めた。あれこれ考えてみたが、21世紀に突入する直前の今、多少なりとも海運や造船の将来の事を真剣に、次代を担う若い人達と一緒に考えてみたいと思った。

そこで、関西造船協会が募集していた特別研究会にも「次世代の海上交通・物流の在り方に関する調査研究会」という研究テーマを応募したところ、うまく採用され、約10名ほどの会員を募って1年間の調査研究を始めることとなった。

この調査研究では、21世紀初頭にかけて大きな経済成長をすることが予想されるアジアを中心にして、世界的な海上交通および海上物流がどう変貌するのか、どのようなシステムが最適と考えられるのか、そのためにはハードの供給者として造船業はどのようにあるべきか、といった種々のテーマについて若手（精神的に若ければ可）の研究者や技術者等が集ってかんかんがくがくと議論を楽しみ、その中でそれぞれのポテンシャルを高め、出来れば将来の日本やアジアの海事産業に貢献しようというのが趣旨である。現在集っている調査研究会の会員は、筆者の大学や商船大学の研究者、造船所の技術者が中心であるが、海運関係者においても、こうしたテーマに興味のある方にはぜひ参加して頂き、色々な立場からの意見や展望を聞かせていただきたいと思っている。資格も経験も不問。ただ、このようなテーマに興味を持っていれば会員資格は完璧。今年中、2ケ月に1回のペースで大阪で集って、議論し、それをさかなにして大いに飲みたいと思っている。

今月の「客船よもやまばなし」は、いささか客船の話題とは離れたような印象をお持ちかもしれないが、ご紹介した調査研究会では物流だけでなく交通も対象としており、ここで各種の客船、カーフェリーなどが取り上げられることとなると期待している次第である。